

## 京都大学の電子ジャーナル — 図書館機構に望む —

京都大学大学院工学研究科 近藤 輝幸

先日、工学研究科化学系図書委員長の大嶋正裕教授と附属図書館情報サービス課の柁川俊明図書館専門員から、附属図書館報「静脩」に電子ジャーナルの問題点を提起する原稿を執筆する様、依頼を受けた。おそらく、私の図書委員歴が長いからだと思う（平成10年4月～）。物書きは私の最も不得手とするところなので、読者には一研究者の独り言として眺めて頂ければ幸いである。

近年の急速な情報化に対応し、平成16年現在、京都大学では約9,000タイトルの雑誌が電子ジャーナルで閲覧可能である。京都大学の電子ジャーナル導入は、平成10年のエルゼビア社の「SD21」というプログラムの試行的導入に始まったと記憶している。しかし、当時の説明会において、エルゼビア社が提示した京都大学の契約予定額は、到底納得できるものではなかった。このように電子ジャーナルの導入は前途多難であったが、当時の附属図書館商議会ならびに関係部局の努力により現在の電子ジャーナルシステムに至った。しかし、現在の電子ジャーナルシステムにもいくつかの重大な問題がある。それらは、「高騰を続ける電子ジャーナル経費の負担方法」、「電子ジャーナルの不正使用（主に一括ダウンロード）による学会、出版社からのアクセス遮断措置」、および「電子ジャーナルと冊子体（紙雑誌）の共存」の三点に集約される。

平成16年度の電子ジャーナル全学経費は約5,700万円であったが、平成17年度は約9,600万円に激増する。私は、工学研究科・工学部図書委員会において、その理由について質問したが、図書掛長からの回答は「タイトル数の増加

ではなく、契約金額の高騰による。」というものであった。不思議なことに、工学研究科・工学部負担経費は平成16年度約670万、17年度約745万であり変化がない様に見える。しかしこれは、平成17年度の電子ジャーナル全学経費の支払に、新たに全学共通経費から約4,250万円が支出されることによる（約4,000万円を要求中）。また、現在のエルゼビア社のフリーダムコレクション契約（エルゼビア社発行の全雑誌が閲覧可能）では、冊子体を中止しても契約総額は変わらないので、冊子体減額は電子ジャーナルの増額分として請求される。

結果、平成16年度は、電子ジャーナル増額分として約1,480万円をエルゼビア社に余計に支払った。平成17年度から工学研究科・工学部図書委員会電子ジャーナル・データベースWGが発足し、平成18年度以降の電子ジャーナル・データベースの経費負担方法について、全学負担による部分と利用者認証システム導入による利用実績を基にした利用者（受益者）負担の組み合わせによる方法を検討することになった。私もこのWG委員の一人であるが、安易な利用者（受益者）負担制度の導入は、教員が学生・院生に対し、「運営費交付金が足りないので、電子ジャーナル・データベースの使用を極力控えなさい」と教育（？）する貧困な結果に繋がるのでは？と危惧する。本来、電子ジャーナルやデータベースは、京都大学のインフラとして整備されるべきものではないか？

もちろん使用者サイドにも問題がある。最近では、7月14日にAIP（American Institute of Physics）サイト提供のASCE（The American Society of Civil Engineers）電子ジャーナルか

ら、一般的な利用範囲をこえる数のダウンロードが連続してシステマティックに行われた（1時間に連続して International Journal of Geomechanics から127論文、Journal of Geotechnical and Geoenvironmental Engineering から88論文が一括ダウンロードされた）ため、KUINS-IIIプロキシサーバ4台中の1台（IPアドレス130.54.130.228）を経由したAIPサイトへのアクセスが遮断された（エルゼビア社の良いところは、この遮断措置が無い）。現状では、KUINS のログは通信の秘密保護のため法的な根拠がない限りモニタリングできないとの理由で、アクセスログによる利用実態の把握は困難であるという。従って、附属図書館は、学会・出版社に対し、調査報告義務を果たせない状況にあるが、これは京都大学として正しい（恥ず

かしくない）姿なのだろうか？また、視点を変えれば、この不正使用行為は、京都大学に所属する多くの研究者に多大な損害を与えている。多発する不正使用問題への対応策について、「図書館機構」は早急に検討し、研究者が納得できる回答を提示してもらいたい。

最後に、電子ジャーナルは安全なのだろうか？もし予告無く電子ジャーナルを提供している出版社が倒産、あるいはサイバーテロにより電子ジャーナルシステムが、突然、崩壊した場合の対応策はあるのだろうか？「京都大学は冊子体（紙雑誌）を全て止めて、電子ジャーナルのみとする様な大学ではない。京都大学で冊子体が必ず一部あるというのが大前提である。」という考え方に、私は強く賛同する。

（こんどう てるゆき）

## 長尾前総長揮毫による額をいただく

長尾前総長揮毫による額は、附属図書館1階吹き抜けにある階段の2階側壁に掲げている。



額には、「垂輝映千春」（輝を垂れて千春を映さんとす）（ヒカ리를タれてセンシュンをテラさんとす）と書かれている。

この文言は、李白の詩「古風」（こふう）「其一」の一節で、「古風」は、むかしふうという意味で、李白が六朝風のきらびやかな在来の詩

にあきたりず、骨格のしっかりした剛健な詩風を復活させようと創ったものである。

本学創立100周年記念式のために作曲家藤家湊子氏に委嘱して創られた式典曲名にはこの一節がそのまま使われており、「その光りが千年の後まで照り映えるような、すばらしい詩を生みたいと思う」という意味で、京都大学の気概を込めたという（『京大広報』1997.11号外より）。

長尾前総長も、学生諸氏に在来の有り様に満足することなく、未来に向かって果敢に挑戦して行ってほしいとの願望を込めて書いてくださったと思う。

なお、長尾前総長揮毫作品には、「古風」其一の抜粋を行書で書かれたものもあり、4階教官談話室に掲げている。